

研究概要

1. 研究名称 または課題名テーマ等

超高齢者の摂食嚥下障害の方針決定 ……病態・アプローチ・予後予測を判断する指標……

2. 研究責任者(当院)

所属：リハビリテーション科

氏名：高橋 博達

共同研究の場合は代表機関 及び 代表者名

機関名：浜松市リハビリテーション病院リハビリテーション科

代表名：藤島 一郎

3. 分担研究者

所属：聖隷佐倉市民病院リハビリテーション科

氏名：志鎌 美帆

4. 研究対象者

2025年11月01日～2026年10月31日の間に、聖隷佐倉市民病院において
〔摂食嚥下チームのリハビリアプローチ〕を受けた方、又は受ける方。

5. 研究の必要性

当院の摂食嚥下アプローチを行う入院症例の約60%が85才越えの超高齢者である。日本人の寿命と重なるこの年代の摂食嚥下障害では、嚥下アプローチの方針決定などに難渋している。つまり、眼前の症例の摂食嚥下障害が、改善しうる“可逆的な”状態なのか、生命の終焉に向かう“不可逆的な”障害なのか、の判断が困難となっている。この困難な判断の一助になる方法として、超高齢者の嚥下障害における5つの指標を設定して図式化し、各症例の嚥下病態やアプローチ方法、機能予後予測を体系的に把握することを目指した。

6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

後方視的研究であり、日常診療にて収集した情報のみを使用するため、本研究によって生じる個人への影響はないと考えられる。

現在の急性期医療の現場では、超高齢者の重症疾患の入院例が増えており、その治療過程では摂食嚥下障害が大きな問題となっている。超高齢ゆえに、病態と重症度によっては、摂食嚥下障害からの回復が困難で、経口摂取以外の栄養補給法を選択すべき必要がしばしば生じる。

目の前の摂食嚥下障害が、可逆的で回復可能なのか、そうでないのかを判断する事の重要性が増してくると予測され、今回の研究ではその判断方法を探ることを目的とした。

超高齢者の摂食嚥下障害の回復可能性を予測することによって、安全で効率的な摂食嚥下アプローチが推進できる可能性が増大すると予測された。

7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1151 (代表)

担当者氏名：高橋 博達

対応時間：8:30-17:00 (平日)